

【論文】

大庭みな子「火草」の世界 ネイティブ、ジェンダー

江種 満子

OBA MINAKO'S "HIGUSA(fireweed)" : Native, Gender

Egusa Mitsuko

「火草」は、大庭みな子がアラスカから日本に送った初期作品である。題材として、この小説には単純な観点では語れない困難さがあり、そのせいか、これまで触れられることはなかった。

本稿では、作者のなかの、あるいは作者の背景としての「日本」「女性」というファクターが、このテキストに登場するネイティブたちの過去・現在とどのように切り結ぶのかを、修辭的な面と主題・内容の面とから考察した。

極北の地アラスカは、古くからネイティブたちが独自の宇宙観にもとづいた生活文化を築いていたが、近代化する欧米の波をロシア・アメリカを通して被り、文化的に制圧されてきたことは周知のところだ。このような場所に、後発国として企業進出した日本人の妻として移住した作者は、もともと自身がジェンダーとして差異化された性であることの問題性に明晰な目を向けていた。けれどもここでさらにネイティブの問題に出会う。これは極めて今日的な課題の先取りだったと言える。

キーワード：火草 (fireweed)、ネイティブ、アラスカ シトカ、
自然、ジェンダー

生き残るためには、「第三世界」は否定的意味
と肯定的意味の両方を、かならず持たなければ
ならない。(トリン・T・ミンハ、(注1))

1

大庭みな子の「火草」(1969新年特別号、文学界)は、アラスカ州シトカルの先住民の民話に取材してつくられた小説(注2)で、大庭の初期の仕事を考えてとき、見逃せない重要な意味をもっている。

大庭が11年間くらしただというアラスカの、その場所に固有の題材を直接使った書き物は、とくに初期の執筆活動にかぎってみれば、エッセイ類には多くても、小説となると思いのほか少ない。この女性作家が「三匹の蟹」で日本の文壇に登場した1968年の頃は、アラスカという場所にまつわる風土や歴史や現況が日本にとってはまだ十分に未知の領域であり、そのような土地についての情報を新しい報告として日本に送るという次元でなら、書き手としての作家の心理的負担は比較的軽かったのではないかと思われる。けれどもひとたびジャンルを変え、「火草」のようにフィクションを立ち上げて先住民の世界を語るとしたら、作者は対象のなかへ積極的に踏み込み、批評的な想像力と構想力を要求されずにはすまされなかつただろう。そのとき作者が抱える課題の大きさは、容易に想像される。

たとえば、シトカルの先住民にまつわるフィクションに取り組むなら、彼らの文化財としての民話も含めたうえで、彼らが少数民族として欧米の近代的物質文明に巻き込まれ、被支配的立場に置かれた歴史や、それに伴う彼らの生活・習俗・文化・価値観の変容などを、書き手としてどのように受け止めるのかという問題を避けて通れない。そのとき作者は、書く主体としてそれらの問題にどのように対処していくのか。「火草」は、そのような問題に対する作者の位置取りを、さまざまな局面から読みとるよう読者に促す。そのようなテキストとして「火草」はわたしたちの目の前にある。にもかかわらず、これまでこの小説について言及されることがなかつたのはなぜだろうか。

周知のように、シトカの先住民には、北アメリカ大陸北部のたいていの先住民と同様、白人に征服されて今日に至った歴史がある。そのような場所に大庭みな子は、1959年に、まだ創立されて間もない日本企業のアラスカパルプの指導的なエンジニアであった夫に同伴してシトカに移住し、それから10年以上もそこに住み、日常生活のなかでごく身近に彼ら先住民の姿を眼にすることになる。のみならず彼らの文化や歴史について、専門の研究者から夫婦いっしょに個人教授を受けるほど特別の関心を寄せてもいた（注3）。

シトカは、さいしょ毛皮の産地としてアラスカ全土に着目したロシアが、先住民たちを征服したのちアラスカの中心地と定めてから繁栄し、のちにロシアからアメリカに売り渡されたときの調印式が行われた場所でもある。その後のゴールドラッシュの僥倖には遭わなかったものの、第二次世界大戦後の1959年には、日本の企業が森林資源への関心をもって進出する。現在人口8700余（注4）のたいへん小さな町でありながら、その土地の上には国際的に多種多様な足跡が踏み重ねられ、先住民たちはそれら代わる代わる押し寄せる波に遭いながら、決してどの波の主にもならなかった。

今でもこの町では、毎年アラスカデーと称し、アメリカがロシアからアラスカを格安で買った日を記念して、調印がおこなわれたこの町の花の海辺の岩の上で昔の譲渡の儀式を再現し、町中をパレードで祝っているという。わたしはこの夏（1999）そのセレモニーのパンフレットを手にする機会があったが、それによるとその場には、1867年のオリジナルの譲渡式に出席したネイティブたちを代表して、民族衣装で盛装したトリングットの人々が立ち会っているようなのだ（注5）。わたしは東洋人の一介の旅行者として、つい第三者の目つきになり、先住のネイティブにとってはもともと自分たちの土地だったものを、それを奪った者同士が彼らの頭越しにもっともらしい厳粛さで譲渡の儀式を毎年繰り返すのを、ただ黙って眺めるためにそこへ招請されているのではないかと複雑な感情を覚えた。とはいえ、このパンフレットの記述から世界制覇の優勝劣敗的な原理の図

式だけを単純に読みとるのでは、いかにもセンチメンタルに過ぎるのではないかという躊躇いもないわけではない。

しかもここにはもう一つ、そのような土地に企業進出した戦後経済復興期の日本人の国民意識の問題が関わってくる。アラスカパルプは、日本の政府が日本はもはや戦後ではないと言わんばかりに、世界に向けて飛躍しようとする企業をバックアップしたケースのうちの一つだったという（注6）。このパルプ工場は、当時これという産業のなかったシトカの住民を吸収する一大労働市場となり、30年以上にもわたってシトカ市の経済を支えることになる。けれども、日本の企業が国際経済に向けて乗り出すに当たって自己規定した日本人としてのアイデンティティ表象には、今の私たちから見ると驚くべき壮絶さがある。

というのもこの頃の『会社年鑑』を見ると、パルプ産業の始めの頁のアラスカパルプの見開きには、まるまる1ページを使った広告があって、そこには「世界を駆ける黄色い顔！」（注7）という大ゴチック体のキャッチコピーが頁の右半分を縦一行に占めながら、太い杭のように打ち込んであった。

敗戦後の日本経済が復活し、やがて迎える高度経済成長期に先立ちつつ世界に羽ばたこうとする自身の身構えを、あえて「黄色い顔」として自制的に、あるいは自虐的にアイデンティファイしていた、という歴史的な証言だとも読める。または、アラスカという異境を想定したとき、この時の日本人はその多民族的な舞台において、けっしてネイティブでもなく、そうかといって「白い人」でもなく、そのあわいに第三の場所を開拓しようという姿勢をとったようでもある。けれどもまた、あくまでも「白い人」に肉薄する決意を秘めた「黄色い顔」の熱い野望をここに読むべきなのかもしれない。あるいはそれらのすべてをこの言葉は含むのかもしれない。

しかしそのことは、何よりも進出の先鋒に立つ男性の意識の問題であって、彼らの背後に控える妻たちが同じようにアグレッシブな「黄色い」意識を共有したのかどうか。とくに大庭みな子は、移住に先立ってもう、女

性として自分をとりまく世界を眺めており、男性とは異質な眼をすでに詩や小説を書きながら培っていた（注8）。

このような時代に、このような歴史をもつ場所に、このような国民意識を背負って、しかも日本人女性としてその地の先住民を書こうとするなら、当然ながらシトカという場所と歴史が招き寄せる人種、民族、ジェンダーという、それこそ今日的な焦眉の課題が、好むと好まざるとを問わず、書く主体の立場を巻き込まずにはいないだろう。

書かれる題材の困難さは、書く側の立場の定義し難さと相乗して、当然ながら作者に主題・構想・修辞などの方策を鍛えることを要求してくる。以下ではそれらの表現の面での工夫にも注目しながら、「火草」を読み解いてみたい。

2

「火草」では土地の名は特定されていない。けれども、アラスカの先住少数民族が白人の文化に触れてまだ間もない頃に時代を設定してあることは明らかである。作中の彼らの宇宙感覚は、文化人類学などの報告（注9）にあるように、ヒトというイキモノが自分を自然現象のサイクルに組み込まれた一部と感じて生きた人類の意識史の古層をいまなお生き生きと留めている。が同時に、彼らの氏族内部では、婚姻や財産相続をめぐる母系的親族制度が揺らぎ始めている。そのことと表裏の関係で男女の性行動（セクシュアリティ）の変容が兆している。いわば彼らの社会システムは危機的な局面に立たされている。これらがテーマやストーリーという意味での「火草」の物語内容になっている。

けれどもそのようなテーマ系が指す方向にたいし、詩作活動もおこなっていた作者は、文壇デビュー作の「三匹の蟹」がそうだったように、初期の多くの小説を散文詩に近い情景を表現の核にしてテキストを構成してき

たが、「火草」もまたその例にもれず、テキストの全体に網を張るような濃密なメタファー網を張りめぐらすことに、作者は強い快樂を見いだしているようだ（注10）。むしろそれは過剰とも言え、作者はまるで自然現象と人間との間を修辞の技で遺漏なく綴じ合わせる営みに傾（かぶ）き、のめりこんでいるのではないかと錯覚されるほどだ。

だがそうだからこそ、主題系はあやうく修辞系の鮮やかさに目を眩まされそうになりながらも、それと競合することを通してテキストに確実な強度をもたらししている。登場してくるのは鴉族と鷲族という二つの氏族からなる先住民だが、彼らの母系制の親族制度は、とくに鴉族において、西洋の「白い人」のもたらしした近代的物質文化とのささやかな交渉がきっかけとなって、ほころびが見え始めている。

その典型的な事例として、老いた族長の若い妻である火草の、押し強いタブーの恋の追求という出来事がある。同時にその恋の消長というストーリーの主軸のまわりには、じつに多彩なイメージが織り込まれ、読者の想像力をいやがうえにもそそり立てる。

その一端として、季節を「夏の終わり」に設定したことにかがえるような、豊富なイメージ喚起にねらいを定めた仕掛けがあげられる。

そのはじめは、若い女主人公の「火草」という名だが、これはアラスカの夏の到来とともに全土を彩るファイアウィード fireweed という野生の紅い花（注11）の名からきている。この花は、このテキストの中で言及されている姿からだけでも、火草という名をもつ女の感情の深さ、生命力の強さを視覚化して余りある効果をもつ。火草は老いた族長に飽きたらず、彼の甥のたくましい若者の鴉に恋してその子を妊娠しているが、彼ら男女の恋と妊娠という一連の性現象を、メタファーの力によって生々しく表象しようとするとき、そこには鮭の凄絶な受精・産卵とその場での死とのイメージが招請される。そのためにほんらい秋の季節の決まり事である鮭の営みが火草の咲き残る夏の終わりへと繰り上げられている。

同じように北極圏の秋から冬にかけての空中の神秘劇オーロラも、火草

と鶉の恋のとらえがたく変わりやすい情動をオーロラの空の変幻きわまりなさに共振させるために、やはりいささか時期尚早に、夏の終わりに出現させられている。

ふつうなら、火草とオーロラと鮭の産卵とが全部そろって同時期になることは、不可能とは言えないだろうけれど、かなりな無理がある。作者はそれらをあえて同時に出現させることによって、人の感情や意識や行動がいかにも自然の事象と一体となって激しく作動するものであるかという、すでに近代主知主義者たちが忘却して久しい主題系を、メタファーをふんだんに使って読者に印象づけようとする。だからじっさいのアラスカの季節の巡りを知らない者は、これらの自然現象の同時進行を疑うこともなく、創り出された華麗で妖しい仮構の自然を、若い愛人たちの華麗さ妖しさと一体にして感受することになる。

このような表現上の特徴はまだたくさんある。

読者のなかにはこの物語に書かれた火草のイメージをとおして、まだ見たこともない花の姿を想い、その魅力にとりつかれた人がきっとたくさんあると思う。けれども「火草」という花の名が、じっさいは作者自身の独創的な名づけだったことを、つい最近までわたしは知らなかった(注12)。大庭みな子が他のエッセイ類でもこの花を「火草」の名で通していた(注13)ために、ついこの名が公式名称なのだと思っていたのだが、日本名では「やなぎらん」と呼ぶのだそうである。(注14)

だが「火草」という小説が読者を惹きつける原点は、何よりもまず、小説のタイトルにも選ばれたこの“火草”という固有名詞の意味作用の大きさにある。アラスカじゅうの夏を紅く彩るファイアウィードを、英語名そのままに「火草」として日本語に翻訳命名したのは、ほかでもない大庭みな子の言語感覚であり、書き手として大庭は、このテキストのなかのあらゆる点に、人の上にも野山の上にも「火」のイメージを野火のように飛散させていく。

同じ一つの花が、異なる環境では異なる生態を見せることがあるとして

も、この花の場合は花を見る者の観点の違い、花から何を感じ取るかの違いが彼我の国の命名に現れている。もしも物語がヒロインの喩として日本風に「やなぎらん」の命名の方向をたどったとすれば、そこにはまるで別種の楚々とした世界がくりひろげられたにちがいない。それが名づけの力というものだ。

英語名のファイアウィードをそのまま表題とした「火草」は、山火事後まっ先に群生して咲くという強い生命力をもつこの花の生態によって、氏族の性の約束を破り続ける異端の若い女を視覚化してみせるのだが、たとえば次のような場面は、「火草」という言葉が花の名でもあり女の名でもあるという名づけの効果を巧みに駆使した好例である。

あたり一面火草^①だった。夕やみのなだらかな丘の荒地をなめる炎のようにそよいでいた。

鶇は火草^②を追って火草^③の繁みに追いこんだ。火草^④はきゅきゅと声を立てた。彼女の声はひと里から離れるとけたたましく、つやを帯び、妖しいゆらぎで鶇を誘いこんだ。彼女は唇に赤い野莓の汁と野やぎの脂をねったものをぬっていたので、彼女の輝いた顔の中でその赤さが吸いつくようなぬめりで彼を煽り立てた。貝殻のように光った白い歯がこぼれ、火草^⑤は笑いをのどにつかえさせて手をひろげた。鶇は火草^⑥を抱きしめて、そこらじゅう噛みつきながらゆれている火草^⑦の中に押し倒した。火草^⑧のあかい炎が火草^⑨の頬と額の上で揺れ、空の青さが眼の中に映っていた。（『大庭みな子全集』第一巻 p 315）

全集ではわずか7行分なのだが、この間に「火草」が9回使われている。それも草の花の火草と女の名の火草と区別がつかなくなるような書き方が故意になされている。この箇所だけ読むと、「火草」の①が草の花だということは推測できるが、次の「火草」の②はどうだろうか。ここはひとまずパスするとして、③は「火草の繁み」とあるので①と同じ草の花と見当がつく。そして②に戻ると、「火草を追って、、、追いこんだ」とあるのだから、これは人か動物か、とにかく生きものらしい。そして⑨まで読み

進めると、「火草」は野の花にも女にもなり、両方の境界が渾然と入り交じり重なり合うことが、このくだりのレトリックなのだとわかる。

しかもこの直前の行では、鶉がりんどう色のオーロラに見とれながらこう言っている。「では、動物の話をやめて、空を見よう。空にいっぱい、一面に火草がそよいでいるよ」(同前、p315)

火草は空にも燃えてオーロラになる。火草という一語は燃え広がって、女にも花にもオーロラにもなる。

火草という女は、自然と融合した構図の中で、男の鶉を惹きつける。つまりネイティブの女の性的牽引力を、同じネイティブに属する男の視線をととして自然化の構図におさめ、しかもそのような構図の物語を日本人の女性の作者が書いている。とにかく、「火草」にはこのような語りの仕組みがあるということをここで確認しておきたい。

また、さきに抜粋した火草と鶉の熱情的でセクシュアルな場面は、ふとわたしに1917年の有島武郎の「カインの末裔」の一場面を想起させたのだが、二つの画面を並べると、かえって「火草」のねらいがいっそうきわだってくる。「カインの末裔」では、「茲に一人の自然から今掘り出されたばかりのやうな男がある」(注15)という作者の自作広告文があるが、その主人公岡仁右衛門に対してもう一人性的な牽引力のある佐藤の妻が配され、二人が神社下の草むらで逢引きするところが次のように書かれている。

ふとある^{ほさ}疎藪の所で彼れは野獣の敏感さを以て物のけはいを嗅ぎ知つた。彼れははたと立ち停まつてその奥をすかして見た。しんとした夜の静かさの中で^{からか}悪諺ふやうな淫らな女の潜み笑ひが聞こえた。(略)

叫びと共に彼れは^{ほさ}疎藪の中に飛び込んだ。とげとげする触感が、寝る時のほか脱いだ事のない草鞋の底に二足三足感じられたと思ふと、四足目は軟いむつちりした肉体を踏みつけた。彼れは思はずその足の力をぬこうとしたが、同時に凶暴な衝動に駈られて、満身の重みを夫れに托した。

「痛い」

夫れが聞いたかつたのだ。彼れの肉体は一度に油をそゝぎかけられて、そゝりたつ血のきほいに眼がくるめいた。

(『有島武郎全集』第三巻、「カインの末裔」p 104 ,105)

屋外の自然の中で、男の性の欲望(セクシュアリティ)が「野獣」の粗暴さをもってサディスティックな欲望とマゾヒスティックな欲望の交錯した爆発ぶりをみせているのだが、書き手の作者はそのような形が性の自然だと見なしているかのようだ。ここで一対の男女がおかれている「疎藪」という自然は、書き手によって人間の性を暴力としてつつき出すための単なる手段に止められているのではないか。それはそれなりに、たしかに自然と人がメタフォリックに一体化されて書かれているにはちがいないのだが、性行動に対する書き手の否定的なまなざしが、自然をもまた焦立たしく凶暴な相でとらえさせているのではないか。

すでに言ったように、「火草」では、男の鶉の目を通して女の火草の性行動が眺められるかたちだったが、火草と鶉の性行動は、女の火草を花のメタファーに包みこんで植物の火草に一体化させる構図の中で、魅惑的な美しいものとして肯定的に眺められていた。言うまでもなく、それは書き手の女性作家自身のまなざしでもあるのだ。

けれどもここで、このような男の視線を通して女を自然化するという認識方法について、急いで誤解を避けておきたい。このような女性の自然化は、男性主導の文化表象の最たる徴表として、反フェミニズムの視線だと非難されかねないものだが、「火草」の場合、杓子定規に決めつけないほうがよい。この小説では男たちもまた自然化された存在なのである。鴉族というトーテムのもとで男たちは雷鳥、鶉、啄木鳥、懸巢などと動物の鳥の名をもち、それぞれの鳥と一体化した動物的な自己像をそれぞれに抱いている。族長の雷鳥などは、雷鳥の羽でつくった上着を着、枯れたはんの木を山から持ち帰ってはその木口から冬の雷鳥の斑点模様を削りだし、木肌をなでながら老いた自分をその物体に転移して慈しんでいる。

このように男女ともに自然化されているのは、これが先住民としてのネイティブの世界観の仕組みだからだ。このことからさらに追いかけて、ネイティブの自然性を特記することは彼らを原始的で野蛮だと貶めることではないか、と非難するとしたら、それもやはり当たらない。またこの逆に、小説は彼らの自然性を西欧近代が失ったものを懐古したり称揚したりしている、と評するのも見当違いというもの。「火草」は言葉を最大限に尽くして、人が自然のなかのイキモノだと語り続けるが、これは彼らが伝承してきた民話に少しでも触れてみれば、彼らの宇宙はまさにそのように語り継がれ、生きられてきた文化であるということがただちに理解されるはずだ（注16）。そのような民族史に、小説「火草」のネイティブ観の基盤はある。

大切なことは、そのような民族史にも関わらず、彼らが彼ら自身の宇宙観を一義的に生きることが、西洋の「白い人」の文明に触れた瞬間から不可能になったことをテキストが洞察していることだ。彼らに押し寄せたその危機的な刻（とき）を、これまで自然と一体化して一義的な宇宙観を生きてきた彼らが、男女それぞれにどのように受け止めて新しい次の刻へと変容しつつ生きのびていくのか。テキストはそこに現れる彼らの多様な姿にたいしても、言葉を探っていることに、わたしは注目したい。

たとえばヴェトナム系アメリカ人のトリン・ミンハは、自身を国際政治上の東南アジアという第三世界の人間と措定し、しかもその女であるという意味では、西洋の白い女性が第二の性ならまさしく第三の性に当たると規定しつつ、次のように発言している。

生き残るためには、「第三世界」は否定的意味と肯定的意味の両方を、かならず持たなければならない。

この言葉は、西洋的な超産業化社会のパラダイムに対比しつつ述べられたものだが、ここでの「第三世界」にはシトカのトリンギットのような先住民も、また女も、もちろん含まれ、「白い人」（男）のパラダイムから見たときの先住民（女）の否定的意味と、逆に先住民（女）から見た場合は、

まさに彼ら彼女らがそのパラダイムに属さないという意味で、自分たちをそこへの「非加入」者として位置づけることによって生み出される内発的な力、すなわち白い人の所属する第一第二の世界を批評し脱構築する力として、肯定的に意味づけることができると主張する。

そのような両面的な視座の必要性を、第三世界に対してトリンは語っているのだが、大庭みな子が「火草」でとらえた先住者達の自然感覚は、次節で眺めるように、トリンの第三世界的な多面性をもっているといえよう。

3

「火草」のなかでは、先住民たちが自然との同一化のなかに人間を見るという一義的な宇宙観を伝承しつつも、もはや後戻りできない歴史の新局面を迎え、新しく出会った西洋文化を自覚的にせよ無自覚的にせよ取り込んでしまった人間が、幾人が登場している。女では火草の恋の一面に見られ、男では火草の恋人の鶉の生活技法や氏族制度に対するイデオロギッシュな位置取りにおいて、そして老いた雷鳥においてさえそのような文化的な変容にたいする了解がうかがえる。

しかしそれとともに、新たに持ち込まれた問題も発生している。火草をめぐる雷鳥と鶉の駆け引きにみちた行動学をとおして現れているのはジェンダーの問題であり、すなわちジェンダーに関わる典型的な局面に露呈するホモソーシャルな男の政治学である。ネイティブの社会には当然その社会固有のジェンダーの取り決めが内在しているが、若い世代ではそれに対する否定の兆しが見られるものの、そこにも男女によって異なる対応のしかたがある。そしてジェンダーの問題は、共同体内部の権力の座をめぐる男の政治学と密接に関係している。

小説の冒頭で読者は、鴉族の男たちが雨の中を黙って歩いているのを見、彼らが向かう先は死んだ火草の通夜の場だと知らされる。じつは作中での

火草は、基本的にはいく人かの男達の記憶として回想の中で語られているだけだ。冒頭で男たちが独り言のようにするごくわずかな発話と、それぞれの男たちが潜める孤独な追想とから、火草が、族長の妻でありながら複数の男性を相手に性行動をもっていたらしい、という情報を早々と読者は受け取る。

彼女の死因について、男たちはお互いに異なる推測や認識をもちながら、火草との関わりの深さに応じてそれぞれの悲しみを追っている。とくに夫の雷鳥が甥たちに向かって口にする言葉と、一人で胸に畳んでいる思いとが異なっているのは、どこことなく火草の死に対して彼にうしろめたさがあるのではないかと疑念をもたせるだろう。「鶇に子供をつくらせて、啄木鳥にゆりかごをつくらせ、この雷鳥に産屋をつくらせる、——火草はそういうふうに徹底すべきだった」と彼は沈黙のなかで気弱に追想する。

が、老いた夫では火草が充たされていなかったことを認めざるを得ないこの男は、族長としての自身の誇りをなだめつつも、母系制の共同体のタブーに触れるはずの族内での女の共有を、役割分担方式で火草自身に選びとらせておけばよかったと譲歩的に思う。(別の族の男に対してなら一人の女を複数の男が共有してもよい、というのが彼らの母系制親族制度なのだと言語手は注釈している。p311) そうしていれば火草が死ぬこともなかったという述懐だが、これは事後的な欺瞞に満ちた言い訳にすぎない。

彼は表向きには「火草は山火事の焼け跡に一面に咲く火草のような女だったよ」と、甥たちにほめ言葉を口にするけれど、じっさい火草は、族長を無視してもっとよい男を夫に選び、族から出奔して二人だけの新家族を創出することを鶇に要求しつづける反逆精神のもちぬしであり、同時に族長への不満を、タブーと知りながら族内の従兄弟たちをそそのかしては秘密裡に解消する放埒な行動力があつた。しかし彼女が、生前に公然と男たちを機能別に分有する可能性は、ほんらいそれが彼らの性制度としてはタブーなのだから、あつてはならないことだし、加えて決定権をもたない火草に決断不足を責めるのは、夫としても族長としても責任転嫁というものだ。

だが肝心な点は、仮に長の雷鳥がタブーに目をつむって火草と甥たちの関係を黙認したとしても、こんどは火草自身がそのような共有関係を欲していない女だということが問題になる。通夜の席での火草の実兄の思い出話によると、火草は共同体の性の制度を逸脱する性行動を娘の頃から露わにしていたというが、鴉族に来てからの彼女の逸脱は単なる放縦ではなくなっている。火草が望んだのは、自分一人で鶯一人を独占し、共同体とは別の場所で彼と対の男女関係を定着させるという願望であって、このような異性交の形は彼らの共同体の親族形成史にはこれまでにない、いかにも異質な、西洋的な恋愛願望と新家庭の夢に似通うものとして書かれている。

通夜の場で火草の兄が偲ぶ死者の娘時代は、禁忌の恋ゆえに沢の奥へ一人で放逐されたほどの激情性によって想像がつくというものだが、雷鳥に救われて雷鳥の家に来てからの火草はたんに多情な女ではなく、雷鳥の老いた妻の「沢の女」のように生涯炉端に座り続けて煙で目が開かなくなるというような鬱屈した女役割は拒絶したいという思いを抱いており、彼女の新しい展開をうかがわせている。鶯に対して鴉族からの離反を迫り、共同体の外での徹底した対関係を夢見るようなことは、共同体ではそれまで見られなかった女の新しいライフイメージなのだ。

火草は、彼らの共同体に伝承された宇宙観とセクシュアリティの制度にたいし、非共同体的な異質なセクシュアリティを接合しようとしているのだが、しかし彼女の願望は共同体の内部の男達の共感を得ることができない。それはなぜなのか。

あらゆる意味でなかなかの政治家である火草の恋人の鶯は、さきに見てきたように彼らの恋を、火草の咲く草原や鮭の産卵、オーロラなどにかこまれて照り翳りさせながらも、彼自身は共同体の人間としては例外的に、けっして自然との一体化のなかに酔いしれるようなことはない。鶯はというと、その頑丈な体躯に似合わず用心深く確答を先送りし続ける。雷鳥の後継者としての次期族長の座に野心があり、のみならずむしろ族長の若い妻との関係によって共同体から殺されたり放逐されることの方を恐れ、共

同体の男達との仲間関係が表象するような「家」への強い執着を示している。つまりはどれをとっても共同体の縦(権力)へのホモソーシャルな執着でないものはない。

共同体の方式によるかぎり、男の鶯は妻以外の女の楽しみも幅広く許されているのであり、火草が望むような対の関係は、鶯にとっては一人の女による囲い込みにほかならず、進んで受け入れられるようなものではない。鶯にしてみれば、複数の女とやがて譲り受ける家の財産と諸権利の魅力は、一人の火草の魅力に惹かれて失うには勘定が合わなさすぎる。

鶯の理由の整いすぎた用心深さが火草に対する情のうすさであるように彼女は彼を責めていた。鶯の用心深さは火草を保護するためのものではなくて彼自身を保護するためのものでしかない、ということも火草は敏感に感じとっていた。奇妙なことにそういう時、火草は動物の愉しさを忘れて、群になって棲息する動物達の偶然のぶつかり合いが生んだ絆のはかなさを不安にいら立たしく思うのである。(略)彼女は鶯に執着し始める自分を怖れていた。(「火草」 p318)

鶯の用心深さがつまりは彼自身を守ることを第一にした自己保存願望にほかならないことことを火草は見抜いていて、彼の最大の関心は二人でまっさらな家庭を創りたがっている火草のうえにはない。近代のセクシュアリティを特色づける異性愛の対関係の純粋化というテーマは、同じように白い人の洗礼を受けた世代でも、男女によって受けとめ方が異なるというメッセージが、テキストの語り手(作者)の声として洩れきこえる。

かつて芥川龍之介は、「西方の人」のなかで、「永遠に守らんとするもの」を女に、「永遠に超えんとするもの」を男に、それぞれのキーワードとして貼りつけ、男のロマンティズムにナルシスティックな思い入れを語っていたけれど(注17)、半世紀後の女性作家が書いた「火草」は、その認識に異議を申し立てている。

鶇は、ある朝ついに族長との対決に打って出る。殺されるくらいならその前に相手を殺す。だが妥協策があるかもしれない。

この後は冒頭部と同じ語り手が、山に向かった二人の男の、息を詰めたさぐり合いから族長による火草毒殺という結末までを語りおさめる。

鶇が現在犯しているタブーはかつて若者だった頃に族長自身が踏んできたタブーの繰り返しだということを、族長はたとえ話にして鶇に聞かせる（注18）が、これは昔の族長達の決断に比べると、明らかに曖昧な態度だ。一世代前の、まだ白い人との接触を持たなかった族長達は、共同体の禁忌が破られたときは、若いときの雷鳥や娘時代の火草が受けたような、共同体からの放逐という厳罰を例外なくルール通りに実行していた。だが老いた雷鳥は、若い頃の自分に対する処罰が前の族長の家の衰退をもたらしたという理由から、彼自身の家を維持するためには、白い人の文明を取り入れて豊富な生活資材を調達できる有能な鶇を、ぜひ引き留めなければならぬと深謀遠慮する。ここには、かれらの共同体のルールがすでに、彼らの利害打算の変化に適合しなくなっていることが書かれているのだ。

二人の男がともに生き残ることを得策とする族長のほのめかしは、頭の悪い鶇によってただちに足もとを見すかされ、逆襲的な揺さぶりをかけられ、彼は火草との出奔を決心してもいないのに、その必要がなくなっただけからこそ出奔を強気に言い募ってみせるほど、狡智にたけている。

若い男にたちうちできない族長は、自分に反逆した若者達（鶇と火草）への怒りを、ここで女の火草一人にすり替える。火草は白日の下で裸の素肌を自分以外の男に見せ、男としての自分を侮蔑した。抹殺されるべきは女であるというすじ書きがとっさにつくられる。共同体にとって有能な男はかけがえがないが、女は代替できる。雷鳥は野草の好きな火草のために、

きつねのてぶくろ（注19）を妊娠のむくみに効く薬草だと鶇に解説しながらつみ取り、持ち帰りって密かに火草の食事に混入させて食べさせる。そして火草はその夜、猛烈な食欲を見せつけながら、とつぜん息絶えるのだ。

だが鶇が火草の死を毒殺死と認識しているのかどうか。雷鳥がきつねのてぶくろを摘むとき、それが薬草でもあるけれど毒草でもあると解説されながら、鶇はその花を「無関心な眼」で眺め、雷鳥の言葉を「きき流した」とわざわざ付記されるからには、その夜火草が食事中に急死したというニュースは、鶇に山での雷鳥の薬草摘みを想起させないはずがない。

であれば鶇は冒頭で火草の花を折りとって眺め、黙って一言も口をきかずに火草の死を悲しんだときから、通夜の席で火草との前日の愉しみを丹念に回想するところまで、すべて火草が族長に毒殺されたことを知ったの上での沈黙だったろうか。そうだとすると火草の抹殺をめぐる暗黙の了解が二人の男の間にあったとする以外には読めないだろう。そうなると雷鳥も鶇も男の論理の軸上で、同じなにかをねらって押したり引いたりしているにすぎない。

語り手はこれが母系制の共同体の物語だとわざわざテキスト中で説明を入れているけれど、男達が決定権を独占し、女が犠牲に供されるということにおいては、この種の母系制は父系性の家父長制と何ら変わるところがないことを語ってしまっている。ネイティブの母系制が内包するジェンダーの問題は、白い人との接触によって、彼らが生き延びることをかけたとき、同時に矛盾もはらんだのだ。

火草は、どのようにしたら雷鳥から自分を鶇に奪い取らせることができるか思案に暮れながら、男達の戦いの中では「力と知力のある者が勝ち、弱くて阿呆な者が負けるのを眺めているのは清らかで、雪の山にのぼる太陽になったような気がする」（p319）と考えていたが、それはいかに甘えた見方であるか。白い人の脅威が迫る時代、ネイティブの男達は暗黙の同盟を結んで、そこから排除された女の火草が敗者に選ばれる。

アラスカのネイティブ達が生きてきた目くるめくような自然の彼方で

は、西洋近代に触れて生き延びなければならない先住者達の知恵と行動における文字通りの死闘が始まったばかりでなく、彼らの内部に男と女の新たな差異化(ジェンダー)の構築が始まったことを、「火草」の作者は鋭く洞察したのだ。しかし、彼らが西洋近代のパラダイムに同一化するかぎり、彼らは白い人の支配下を免れないだろうという作者の声もまた、ひそかに聞きとることができる。

注

注1、トリン・T・ミンハ『女性・ネイティブ・他者』(竹村和子訳1995 岩波書店)

注2、小説「火草」をもとに後年書かれた「詩劇火草」(1985・8、『潭』3号)の末尾には、「一九六八年だったと思うが、アラスカにいた頃、その地の民話をもとにして「火草」という小説を書いた」とある。ただし小説の「火草」がどの程度民話に依拠しているのかは不明である。本稿では民話とは別の独立したテキストと見なして考察している。

注3、アラスカ生活を中心にしたエッセイ集『魚の泪』(1971、中央公論社) p25による。

注4、アラスカパルプの企業閉鎖の残務整理のためにアラスカ在住の角田敦夫氏が作成されたシトカレポート COMMUNITY PROFILE OF CITY & BOROUGH OF SITKA (1999)によると、1998年現在総人口8779人、内ネイティブ21%である。

注5、アラスカデーのためにシトカで発行された小冊子“ALASKA DAY” p6参照。(Edited by Kathy Kyle)

注6、大庭みな子氏の夫である大庭利雄氏の談話によるとアラスカパルプ、アラビア石油、ウジミナス製鉄所である。『アラビア石油創立10周年記念』(昭43 3アラビア石油)、『アラスカ総覧』(昭58 .10アラスカ会)、『世界地理風俗大系』第5巻「南アメリカ」(昭43 3第4版 誠文堂新光社)なども参照した。

注7、『会社年鑑』1961年版 p976(日本経済新聞社)

注8、大庭みな子は小学生に頃から作家を志したと言い、詩集『錆びた言葉』所収の詩作品や小説の習作が書かれていた。

注9、たとえば文化人類学者の原ひろ子のカナダ北部のヘヤー・インディアンのフィールドワーク「ヘヤー・インディアンの世界」(1989 平凡社)や「極北のインディアン」(1979 玉川大学出版部、中公文庫)などを参照。

大庭みな子「火草」の世界

注10、三浦雅士「隠喩について 大庭みな子論」(『小説という植民地』、1991、福武書店)が大庭みな子のメタファーに注目して大庭文学を論じた。

注11、1999年夏に、大庭みな子氏から直接このことを聞いた。

注12、注3のエッセイ集には、「火草、ファイアウィードは、アラスカに一番よく見られる花で、地域によって数種あり、八フィートもあるかなり丈の高いもの、地を這うように低いものもあります。四片の薄い紅の花びらが可憐で、長い柄のまわりに下の方から次第に花をつけ、見渡す限り密生してそよいでいるさまは、原を這う炎を思わせませす。乾燥した季節に、この地方によくおこる山火事の後に最初に生える植物がこの火草です。」とある。(p23、「火草とエスキモーたち」)

注13、注12に同じ

注14、宮澤賢治は「オホーツク挽歌」や「サガレンと八月」などに、一面に咲く「やなぎらん」を描いた。

注15、自己を描出したに外ならない「カインの末裔」 1919・1

注16、Postell, Alice and Johnson, A.P. *Tlingit Legends* Sheldon Jackson Museum, 1986 [1976]

Beck, Mary L. *Heroes & Heroines : Tlingit-Haida Legend* Alaska Northwest Books, 1989

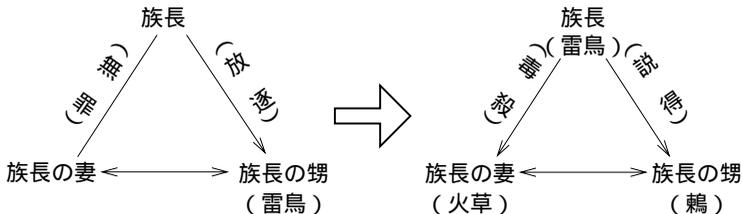
Wallis, Velma. *Two Old Women : An Alaska Legend of Betrayal, Courage and Survival* Harper Perennial, 1994 [1993]

Servid, Carolyn.(ed.) *From the Island's Edge : A Sitka Reader* Graywolf Press, 1995

de Laguna, Frederica. *Tales from the Dena : Indian Stories from the Tanana, Koyukuk, & Yukon Rivers* University of Washington Press, 1995

注17、芥川龍之介『西方の人』1926

注18、雷鳥と鶉の関係図の対比 族長の処罰は男女にたいして逆転している。



注19、ジギタリスの一種、脚本の「火草」ではこの草の花を「きつねのてぶくろ」と明記。火草と同じ時期に咲くアラスカの夏の花。